

様式6 (第15条第1項関係)

平成29年3月31日

独立行政法人  
日本学術振興会理事長  
殿

研究機関の設置者の所在地	〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1	
研究機関の設置者の名称	国立大学法人東京外国語大学	
代表者の職名・氏名	学長・立石 博高 (記名押印)	
代表研究機関名及び機関コード	東京外国語大学	12603

平成28年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金  
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2801	補助事業の完了日	平成29年3月31日	関連研究分野(分科細目コード)	言語学(3201)
------	-------	----------	------------	-----------------	-----------

補助事業名(採択年度)	補助金支出額(別紙のとおり)
危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築	18,168,692円

代表研究機関以外の協力機関:名古屋大学

海外の連携機関:オーストラリア国立大学(ANU)、メルボルン大学、ナンヤン工科大学(NTU)、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)、ソウル大学

1. 事業実施主体

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 ナカヤマ トシヒデ 中山 俊秀	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	言語類型論・ワカシュ語言語(北米北西海岸)、琉球語
担当研究者 ワタナベ オノレ 渡辺 己	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	セイリッシュ語
星 イズミ 星 泉	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	チベット語
ワタダ ヒデオ 澤田 英夫	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授	ビルマ諸語
ヤマゴシ ヤスヒロ 山越 康裕	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	モンゴル諸語
タニヒト トクシ 具人 徳司	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	チュクチ語
アラカワ シンタロウ 荒川 慎太郎	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	文献学・西夏語
シオハラ アサコ 塩原 朝子	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	インドネシア諸語・言語類型論
シナガワ ダイスケ 品川 大輔	東京外国語大学	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授	バントゥー諸語(特にスワヒリ語、ロンボ語)
ホリエ カツ 堀江 薫	名古屋大学	大学院国際言語文化研究科	教授	言語類型論、対照言語学
計10名				

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先(電話番号、e-mailアドレス)
ナカムラ ヨリイチロウ 中村 洋一郎	研究協力課研究協力係・係長	042-330-5593、kenkyu-kenkyo@tufs.ac.jp

※2頁以降は、交付決定を受けた時点の事業計画の項目に合わせて必要に応じて修正すること。

## 2. 本年度の実績概要

若手派遣研究者3名の海外連携研究機関への派遣を開始するとともに、海外連携研究機関から11名の連携研究者を招聘して、(1)一次データの公開、(2)一次データに基づくコーパスの構築、(3)コーパスに基づく理論的研究、ならびに、(4)一次データに基づく言語の通時的変化に関する研究を行った。

一次データの公開に関しては、メルボルン大学から Thieberger 博士、ANU から Riesberg 博士を招聘するとともに、若手研究者野元を派遣し、共同でメタデータ等を付与することにより、オーストラリアの言語アーカイブ PARADISEC にドゥスン語などマレーシア・インドネシアの11言語の危機言語・少数言語のデータをアーカイブし、公開した。

コーパス構築とコーパスに基づく理論的研究に関しては、NTU から Bond 博士を招聘し、担当研究者塩原、若手研究者野元と共同でマレー語・インドネシア語のコーパス構築事業を開始した。NTU 側からは Bond 博士のほか、Kratochvil 博士も加わりコーパスに用いるマレー語・インドネシア語のデータの収集を共同で行っている。またマレー語とインドネシア語の自動判定の手法の研究も共同で行った。一方日本側ではこれまで日本側で蓄積してきたデータを整備するとともに、マレー・インドネシア語の電子言語資源ポータルの一部となる、マレー語・インドネシア語のコーパス検索システム MALINDO CONC を設計し、その試行版を完成させた。

また、ANU から Evans 教授と Arka 博士を、メルボルン大学から Schnell 博士を招聘し、International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics を開催し、危機言語・少数言語のコーパス構築・アノテーション付与・それに基づく理論的研究についての研究計画を立てた。具体的には、Arka 博士と担当研究者塩原はバリ語のコーパス構築とそれに基づく理論的研究についての共同研究を、Schnell 博士と担当研究者塩原、若手研究者野元、児倉、倉部、木本はアノテーションシステム GRAID を用いた共同研究を開始した。特に野元は1月から2か月間メルボルンへの派遣を受け、Schnell 博士とマレー語のコーパスに基づく理論的研究に関して集中的な共同研究を行った。木本も3月末より Schnell 博士と同様の研究を開始した。

一次データに基づく言語の通時的変化に関する研究に関しては、SOAS からチベット語の専門家である Hill 博士を招聘し、International workshop: Studies of Tibet-Burman languages, based on the corpus: Tibetan and Tangut を開催してコーパスに基づくチベット・タングート系言語の分岐に関する共同研究計画を策定した。さらに担当研究者荒川は SOAS に2か月間出張し、Hill 博士の協力を得て、西夏語テキストのコーパスを作成した。具体的には、西夏語の口語体表現を研究する上で有用な西夏文『法華経』第4巻の全ての西夏文字録文・推定音・グロス・訳注からなる、約60000字のデータ入力を行った。また、SOAS から Marten 教授、Gibson 博士、Guérois 博士を招聘し、バントゥ諸語の分岐と通時的変化に関する共同研究の基盤になる130以上の文法項目を含むパラメータについて議論を行った。さらに、担当研究者山越と若手研究者児倉がソウル大学に出張し、連携研究者 Juwon 教授とソウル大学の辞書データベースを利用して行う共同研究の計画を立てた。さらに NTU から Coupe 准教授を招聘して文法化および名詞化に関する最新の研究成果に関する意見交換を行うフォーラムを2回開催し、あわせてミャンマーおよび東北インドのチベット・ビルマ系言語の通時的変化と多様性に関する共同研究に向けての議論を行った。若手研究者倉部はミャンマーで2週間調査を行い、ジンポー語を中心とした諸言語の語りのデータを収集した。その後、若手研究者倉部と担当研究者澤田は NTU に1週間出張し、LaPolla 教授および Coupe 准教授とともに、上記の共同研究についての議論をさらに深めた。若手研究者倉部は3月末より NTU に約2か月間滞在し、ミャンマーで収集したデータを利用しつつ LaPolla 教授・Coupe 准教授と共に共同研究を開始する。

### 3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

(1) 一次データの公開事業：日本側研究者が持つ危機言語・少数言語の一次データを広く利用可能な形でアーカイブするという到達目標を順調に達成しつつある。28年度には若手研究者野元、担当研究者塩原により 11 言語のデータを連携研究者 Thieberger 博士とのメタデータ等に関する協議を経てアーカイブ・公開するとともに、29年度以降のアーカイブに向けて若手研究者倉部・児倉・木本が自身のデータのアーカイブ・公開に向けて同様の共同研究を開始している。

(2) 一次データに基づくコーパスの構築：危機言語・少数言語の一次データに転写・翻訳・文法情報などの情報を付し、電子コーパスとして整備するという到達目標に対して、担当研究者塩原と若手研究者野元、倉部・児倉・木本がメルボルン大学の Schnell 博士と共同研究を開始し、順調に推移している。Schnell 博士との共同研究は各メンバーが一定量のデータ（1000 クローズ）のナラティブに現れる指示対象に対して、GRAID という手法（形式（名詞句・代名詞・ゼロ形など）と文法関係・人称・有生性に関するアノテーションをつける手法）で進めており、既に各研究者が 100 クローズ程度のデータに関してアノテーションを付与している。アノテーションを整備したコーパスは本研究における(3)の理論研究の基盤となりうるばかりでなく、言語学のみならずその他の分野に提供できる汎用性のある研究資源であり、その点でも重要な研究成果であると言える。

コーパス構築のもう一つの到達目標は、マレー語など比較的話者数が多いにもかかわらず、研究資源が整備されていない言語のコーパス構築・利用方法の確立である。この分野では担当研究者塩原、若手研究者野元と NTU の Bond 博士、Kratochvil 博士との共同研究が順調に推移している。既に日本側ではマレー語・インドネシア語のコーパス検索システム MALINDO CONC を設計し、その試行版を完成させた。このシステムは様々なデータの検索に適用できる汎用的なものであるが、現段階では著作権に関する問題が少ないウェブからのデータに適用し、(3)の理論的研究に対する利用可能性を検討している。ウェブからのデータはマレー語とインドネシア語の判定が難しいという問題があるのだが、その点に関して若手研究者野元は Bond 博士と共同研究を進めており、主に両言語の異綴語、高頻度語を利用し、既に一定の成果を出している。今後 NTU 側と収集した多様なデータに上記の検索システムや言語判定システムを適用することにより、信頼性のあるコーパス構築とその利用が可能になる。

(3) コーパスに基づく理論的研究：コーパスに基づく理論的研究は上記(1)(2)の研究の到達点に位置するものである。少数言語・危機言語に関しては Schnell 博士との共同研究により、GRAID によるアノテーション付与を利用して各言語の指示対象が取りうる形式とその文法関係・有生性との相関関係に関する数量的研究を行うことが、マレー語に関しては文構造に影響を及ぼす接辞の分布と述部内に現れる人称代名詞の共起に関する数量的研究を行うことが連携研究機関との協議により決定している。研究の前提となる (2)で述べたコーパス構築が順調に推移していることから、この点についても期間内における到達目標達成が十分に期待できる。

(4) 一次データに基づく言語の通時的変化に関する研究：チベット語・西夏語に関する SOAS との共同研究に関しては、連携研究者 Hill 博士の招聘、担当研究者荒川の派遣により、コーパスに基づくチベット・タングート系言語の分岐に関する共同研究計画を策定した。特に荒川は SOAS への出張中、Hill 博士の協力を得て、西夏語の口語体表現を研究する上で有用な西夏語テキストのコーパスを作成した。また、バントゥ諸語の分岐と通時的変化に関する SOAS との共同研究に関しては、Martin 教授らの招聘により、共同研究の基盤になる 130 以上の文法項目を含むパラメータについて議論を行い、比較の手法を確定した。いずれのチームもすでに今後の具体的な共同研究への基盤を確立しており、研究期間内の到達目標達成が十分に期待できる。

#### 4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

##### ①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。</li> <li>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</li> <li>・著者名について、責任著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付してください。</li> <li>・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。</li> </ul>	
1	澤田英夫。「ロンウォー語の複動詞構造」, 東南アジア諸言語研究会編『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』(東京:慶應義塾大学言語文化研究所), 査読無, 162-207, 2017年
2	荒川慎太郎。「大英図書館所蔵西夏文「礼贊文」断片について—黒水城出土チベット語文献中の資料 K.K.II.0303.a—」, 『京都大学言語学研究』, 査読有, 35号, 195-216, 2017年
3	<u>Hiroki Nomoto</u> , Takuya Miyauchi and <u>Asako Shiohara</u> (eds.) <i>AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association</i> (Canberra: Asia-Pacific Linguistics), 査読無, 2016年
○ 4	Anthony Jukes and <u>Asako Shiohara</u> . Training for documenting minority languages in Indonesia and Malaysia, <i>Asian and African Languages and Linguistics</i> , 査読有, 11号, 2017年 (採録決定済)
5	<u>Asako Shiohara</u> . Pseudo-cleft construction in the Sumbawa Besar Dialect of Sumbawa. In Hiroki Nomoto, Takuya Miyauchi and Asako Shiohara (eds.) <i>AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association</i> (Canberra: Asia-Pacific Linguistics), 査読無, 258-272, 2016年
6	山越康裕。「シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現: 分詞の定動詞化に関する3類型」, 『北方人文研究』, 査読無, 10号, 79-96, 2017年
7	<u>Hiroki Nomoto</u> . Passives and clitic doubling: A view from Classical Malay. In Hiroki Nomoto, Takuya Miyauchi and Asako Shiohara (eds.) <i>AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association</i> (Canberra: Asia-Pacific Linguistics), 査読無, 179-193, 2016年
8	野元裕樹(監修). 『ポータブル日マレー英・マレー日英辞典』(東京:三修社), 査読無, 2016年
○ 9	野元裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー. 「マレーシア語の焦点表現と名詞述語文」, 『語学研究所論集』, 査読有, 21号, 171-189, 2016年
10	<u>Keita Kurabe</u> . A classified lexicon of Shan loanwords in Jinghpaw, <i>Asian and African Languages and Linguistics</i> , 査読有, 11号, 2017年 (採録決定済)
11	<u>Keita Kurabe</u> . Phonology of Burmese loanwords in Jinghpaw, <i>Kyoto University Linguistic Research</i> , 査読有, 35号, 91-128, 2017年
12	<u>Keita Kurabe</u> . Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) <i>The Sino-Tibetan Languages</i> (2nd Edition) (London & New York: Routledge), 査読有, 993-1010, 2017年
13	<u>Keita Kurabe</u> and Masao Imamura. Orthography and vernacular media: The case of Jinghpaw-Kachin, <i>IIAS Newsletter</i> (Leiden), 査読無, 75号, 36-37, 2016年

## ②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <p>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、責任発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。</p> <p>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。また、主要連携研究者については<u>斜体・太下線</u>、連携研究者については<u>斜体・破線</u>としてください。</p>	
1	澤田英夫.「ビルマ語群北部下位語群ギャンノツ土語についての予備的報告」,2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会,京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター,口頭発表,審査無,2017年3月
2	澤田英夫.「ロンウォー語の直示的移動動詞」,慶應義塾大学言語文化研究所公開シンポジウム「移動動詞表現の対照—東南アジア諸言語の「行く・来る」を中心に—」,慶應義塾大学,口頭発表,審査無,2017年3月
3	Hideo Sawada. Multi-verb constructions of Standard Lhaovo, The 49th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Jinan University (China), 口頭発表, 審査有, 2016年11月
4	Shintaro Arakawa. Linguistic researches of Tangut based on the corpus, International workshop: Studies of Tibet-Burman languages based on the corpus: Tibetan and Tangut (東京外国語大学 AA 研「頭脳循環プロジェクト」・科研基盤 B (荒川代表) 共催国際 WS), 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2017年1月
5	Shintaro Arakawa. Directional prefixes in Tangut, Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages (東京外国語大学 AA 研「頭脳循環プロジェクト」・科研基盤 B (荒川代表) 共催国際 WS), 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2017年1月
6	Shintaro Arakawa. Re-analysis of the Tangut suffix for ‘dual’, Recent Advances in Tangut Studies, SOAS, University of London, 口頭発表, 審査無, 2017年2月
○ 7	Yanti, Dominikus Tauk and Asako Shiohara. Preliminary report on documentation of Helong language, International workshop for documenting endangered languages in the Nusa Tenggara Timur Province in Indonesia, Indonesia, 口頭発表, 審査無, 2017年3月
8	Hiroki Nomoto and Asako Shiohara. An analysis of the Malay/Indonesian particle ya, 東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究 2015年度第1回研究会, 東京外国語大学, 口頭発表, 審査無, 2016年12月
9	品川大輔.「キリマンジャロのことば—チャガ諸語の共時的多様性と分岐のプロセス」, 京都大学タンザニアフィールドステーション (FS) セミナー (第18回), International School of Tanganyika (ダルエスサラーム・タンザニア), 口頭発表, 審査無, 2017年1月
10	品川大輔.「アフリカ都市言語研究の動向と都市言語の諸相—シェン(Sheng)を事例に—」, 日本アフリカ学会関西支部主催 2016年度第1回若手研究会「表現する主体としてのアフリカの人々—日常生活の言語・文学・音楽—」, 大阪大学, 口頭発表, 審査無, 2017年1月
11	品川大輔.「最新版 Microvariation パラメーター内容の紹介およびバントゥ諸語のマイクロバリエーション国際ワークショップ (3月3-5日開催予定)の事前打ち合わせ」, AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ1)」 2016年度第2回研究会, 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2016年12月

12	品川大輔・阿部優子。「ダルエスサラーム大学 Microvariation ワークショップ報告」, AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ1)」2016年度第2回研究会, 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2016年12月
13	Keita Kurabe, Aspiration dissimilation in Jinghpaw, LMS Seminar, Nanyang Technological University (Singapore), 口頭発表, 審査無, 2017年3月
14	Keita Kurabe. Means to count nouns in Tibeto-Burman, The 5th meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian Geolinguistics”, 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2017年2月
15	Keita Kurabe. General remarks on means to count nouns in Asia, The 5th meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian Geolinguistics”, 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2017年2月
16	倉部慶太。「ジンポー語における有気音の無気音化」, 日本言語学会第153回大会, 福岡大学, 口頭発表, 審査有, 2016年12月
17	Keita Kurabe. Iron in Tibeto-Burman, The 4th meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian Geolinguistics”, 東京外国語大学 AA 研, 口頭発表, 審査無, 2016年11月
18	Keita Kurabe. Grammatical relations in Jinghpaw, The 49th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Jinan University (China), 口頭発表, 審査有, 2016年11月

## 5. 若手研究者の派遣実績 (計画)

### 【海外派遣実績 (計画)】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
派遣人数	3人	5人 (3人)	5人 (3人)	7人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名：野元裕樹・准教授

<p>(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)</p> <p>野元は派遣中に本課題の事業のうち、主に「言語コーパス構築」と「コーパスを用いた理論的研究」に参画した。また、当初の計画には含まれなかった「言語データアーカイブ」についても活動を行った。「言語コーパス構築」と「コーパスを用いた理論的研究」の領域では、メルボルン大学の Stefan Schnell 博士のアノテーションシステム GRAID を既に野元が構築していた「マレー語話しことばコーパス」の一部に付与する作業を行った。それに際して、来年度以降「名詞句の数標示と情報構造の関係」に関する理論的研究への適用を行うため、GRAID のタグセットに複数を表す PL というタグを加えた。「データアーカイブ」の領域では、メルボルン大学の Nicholas Thieberger 博士の協力を得て、少数言語ドゥスン語リワン方言へメタデータ付与を行い、アーカイブを行った。</p> <p>(具体的な成果)</p> <p>200 クローズ程度のマレー語データに GRAID によるアノテーションを付与した。また、ドゥスン語のデータを PARADISEC にアーカイブした、マレーシア、サバ州で話されている少数言語のドゥスン語リワン方言の音声・動画ファイルを登録した。</p>
--

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア、メルボルン大学、 言語学科、Nicholas Thieberger 博士	61 日	0 日	0 日	61 日
シンガポール、ナンヤン工科大学、 言語学・多言語研究科、Francis Bond 准教授	0 日	330 日	0 日	330 日

派遣者④の氏名・職名：倉部慶太・日本学術振興会特別研究員

<p>(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)</p> <p>倉部はナンヤン工科大学への派遣中には本課題の事業のうち「通時的変化・分岐に関する研究」に参画する。具体的には、連携研究者である Randy LaPolla 教授および Alexander Coupe 准教授とともに、チベット・ビルマ諸語の通時的変化・分岐に関する共同研究を行う。特に、ジンポー語と文化的緊密性を持つラワン語を研究している Randy LaPolla 教授とともに、ジンポー語とラワン語の言語接触と歴史変化に関する研究を行うことで、北部ミャンマーにおける言語接触によってそれぞれの言語が通時的にどのような言語変化と言語収斂を経たかを、周辺言語との比較を含めて解明する。</p> <p>(具体的な成果)</p> <p>ナンヤン工科大学に渡航し、チベット・ビルマ諸語の通時的変化・分岐に関する共同研究、特にジンポー語とラワン語の言語接触と歴史変化に関する研究を開始した。</p>				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
シンガポール、ナンヤン工科大学、 言語・多言語研究科、Randy LaPolla 教授	2 日	90 日	0 日	92 日
オーストラリア、メルボルン大学、 言語学科、Nicholas Thieberger 博士	0 日	210 日	0 日	210 日

派遣者⑧の氏名・職名：木本幸憲・日本学術振興会特別研究員（名古屋大学）

<p>(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)</p> <p>木本はメルボルン大学への派遣中には本課題の事業のうち、主に「言語コーパス構築」と「コーパスを用いた理論的研究」に参画予定である。メルボルン大学の Schnell 博士のアノテーションシステム GRAID を既に木本が収集しているアルタ語のデータの一部に付与する作業を行う。</p> <p>(具体的な成果)</p> <p>メルボルン大学に渡航し、アノテーションシステム GRAID を用いたコーパスを用いた理論的研究を開始した。</p>				
派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア、メルボルン大学、 言語学科、Nicholas Thieberger 博士	2 日	101 日	0 日	103 日
英国、ロンドン大学東洋・アフリカ 研究学院 (SOAS)、言語学科、Nathan Hill 博士	0 日	172 日	140 日	312 日

## 6. 研究者の招へい実績（計画）

### 【招へい実績（計画）】

年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	合計
招へい人数	11 人	2 人 ( 2 人)	8 人 ( 7 人)	12 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の招へい実績】

#### 招へい者①の氏名・職名：Nicholas Evans（特別教授）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>Nicholas Evans 教授は本事業の主要研究者であり、本事業の連携の核となる ARC Centre of Excellence for the Dynamics of Language(CoEDL)のディレクターである。本事業の全体的方向性に対してアドバイスを与える役割を担い、平成 28 年度の招へいでは、Evans 教授と協議の上、国際シンポジウム “International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics”を開催した。そこで Evans 教授は基調講演を行い、本事業において共同で遂行するデータを生かした言語研究の理念を周知した。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>上記シンポジウムにおける基調講演 “Do grammars do best what speakers did most: the Social Cognition Parallel Interview Corpus (SCOPIC) cross-linguistic corpus on social cognition in grammar”</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学 科、オーストラリア 中山 俊秀（東京外国語大学）	3 日	0 日	7 日	10 日

#### 招へい者②の氏名・職名：I Wayan Arka（准教授）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>I Wayan Arka 博士はオーストラリア国立大学において言語ドキュメンテーション、および、オーストロネシア諸語（バリ語・マロニ語）の研究を行っている。Arka 博士は本課題の事業のうち特に「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」に参画する。招へいでは Arka 博士が提供するバリ語の教科書データの収集に基づくバリ語のコーパス構築とその理論的研究への適用に関する共同研究の計画を策定した。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>バリ語のコーパスの基盤となる教科書データ（教科書約 10 冊分）の収集</p> <p>国際シンポジウム “International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics”における講演 “On the pedagogical literacy for local (endangered) languages: lessons learned from Indonesia”</p>				
---	--	--	--	--

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学科、 オーストラリア 塩原 朝子（東京外国語大学）	8 日	0 日	7 日	15 日

### 招へい者③の氏名・職名：Nicholas Thieberger(研究員)

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>Nicholas Thieberger 博士は本事業の連携研究者であり、本事業の連携の核となる CoEDL の Chief Investigator である。また、CoEDL がサポートする、現在世界で最も信頼性が高い言語アーカイブ PARADISEK のディレクターである。Thieberger 博士は本課題の事業のうち特に「言語データアーカイブ」「言語コーパス構築」に参画する。平成 28 年度の招へいでは「言語データアーカイブ」「言語コーパス構築」に関するワークショップを開催し、日本側の担当研究者・若手研究者とともにアーカイブするデータ・構築するコーパスの規格を策定した。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>11 言語のデータを自身がディレクターである言語アーカイブ PARADISEC に登録し公開した。ワークショップ “Three-day lecture and workshop on data management and archive (16-18 January, 2017)” を開催し、講師を務めた。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
メルボルン大学、言語学科、オース トラリア 中山 俊秀（東京外国語大学）	21 日	0 日	7 日	28 日

### 招へい者④の氏名・職名：Stefan Schnell（ポスドク研究員）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>Stefan Schnell 博士は本事業の連携の核となる CoEDL のポスドク・フェローである。Stefan Schnell 博士は本課題の事業のうち特に「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」に参画する。平成 28 年度の招へいでは、国際シンポジウム “International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics” において講演を行い、「コーパスを利用した理論的研究」の可能性を周知した。また、ワークショップ Lecture and Practical session on GRAID: Annotating corpora for research on referentiality across typologically diverse languages を開催し、講義を行うとともに日本側の若手研究者を指導し若手研究者がアノテーションシステム GRAID を各自のデータに付与するのを助けた。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>“International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics” における講演 “Conditions on object agreement and pronominalisation - a corpus-based typological study”</p> <p>ワークショップ Lecture and Practical session on GRAID: Annotating corpora for research on referentiality across typologically diverse languages における講義 “Lecture: Introduction to problems of referential choice and its interaction with information packaging and event</p>				
--	--	--	--	--

representation” および “Typology of person agreement systems and accounts of their evolution”				
上記ワークショップなどによる日本側の担当研究者との協議・若手研究者の指導：5 言語の計 500 程度のクローズに対する GRAID によるアノテーションの付与に関する				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
メルボルン大学、言語学科、オーストラリア 塩原 朝子（東京外国語大学）	20 日	30 日	20 日	70 日

#### 招へい者⑤の氏名・職名：Francis Bond（准教授）

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）				
Francis Bond 准教授は本事業の連携研究者であり、NTU において多言語・多文字の電子的データ処理で実績を上げている。Bond 博士は本課題の事業のうち特に「言語コーパス構築」に参画する。28 年度の招へいでは、担当研究者塩原、若手研究者野元とマレー語・インドネシア語のコーパス構築について協議を行った。また将来的にコーパスへ付すアノテーションの一部となるワードネットに関する講演を行った。				
（具体的な成果）				
講演「日本語の意味を世界につなぐ日本語 Wordnet」				
マレー語とインドネシア語の判別システムの開発に関する共同研究				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ナンヤン工科大学、言語学・多言語研究科、シンガポール 塩原 朝子（東京外国語大学）	11 日	0 日	7 日	18 日

#### 招へい者⑥の氏名・職名：Nathan Hill（講師）

（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）				
Nathan Hill 博士は本事業の連携研究者であり、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）でチベット諸語のコーパス構築、チベット諸語に関する歴史的研究を行っている。Hill 博士は本課題の事業のうち特に「言語コーパス構築」「言語の歴史・分岐に関する研究」に参画する。平成 28 年度の招へいでは、International workshop: Studies of Tibet-Burman languages, based on the corpus: Tibetan and Tangut を開催して、担当研究者荒川とともにコーパスに基づくチベット・タングート系言語の分岐に関する共同研究計画を策定した。また担当研究者荒川の SOAS への出張中は、西夏語テキストのコーパス作成に協力した。				
（具体的な成果）				
International workshop: Studies of Tibet-Burman languages, based on the corpus: Tibetan and Tangut における講演 ”Linguistic researches of Tibetan based on the corpus”				
西夏文『法華経』第 4 巻の全ての西夏文字録文・推定音・グロス・訳注からなる、約 60000 字のデータ入力への協力				

招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）、言語学科、英国 荒川 慎太郎（東京外国語大学）	15 日	14 日	7 日	36 日

招へい者⑦の氏名・職名：Lutz Marten（教授）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>Lutz Marten 教授は本事業の連携研究者であり、SOAS でバントゥ諸語のバリエーションに関する研究を行っている。Marten 教授は本課題の事業のうち特に「言語の歴史・分岐に関する研究」に参画する。</p> <p>平成 28 年度の招へいでは、担当研究者品川、若手研究者阿部とバントゥ諸語の形態統語論的バリエーションに関する共同研究に関する打ち合わせを行うとともに、国際ワークショップ International Workshop on Bantu Microvariation を共同企画・運営し、研究発表を行うとともに、担当研究者・若手研究者が持つ言語データのパラメータ値の同定を共同で行った。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>International Workshop on Bantu Microvariation における講演 “Morphosyntactic variation in Bantu: Convergence and divergence”（招聘者⑨⑩との共同講演）</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）、言語学科、英国 品川 大輔（東京外国語大学）	7 日	0 日	37 日	44 日

招へい者⑨の氏名・職名：Rozenn Guérois（ポスドク研究助手）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画）</p> <p>担当研究者品川、若手研究者阿部とバントゥ諸語の形態統語論的バリエーションに関する共同研究に関する打ち合わせを行うとともに、国際ワークショップ International Workshop on Bantu Microvariation を共同企画・運営し、研究発表を行うとともに、担当研究者・若手研究者が持つ言語データのパラメータ値の同定を共同で行った。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>International Workshop on Bantu Microvariation における講演 “Morphosyntactic variation in Bantu: Convergence and divergence”（招聘者⑧⑩との共同講演）</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）、言語学科、英国 品川 大輔（東京外国語大学）	7 日	0 日	0 日	7 日

招へい者⑩の氏名・職名：**Hannah Gibson**（ポスドク研究員）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画）</p> <p>担当研究者品川、若手研究者阿部とバントゥ諸語の形態統語論的バリエーションに関する共同研究に関する打ち合わせを行うとともに、国際ワークショップ <b>International Workshop on Bantu Microvariation</b> を共同企画・運営し、研究発表を行うとともに、担当研究者・若手研究者が持つ言語データのパラメータ値の同定を共同で行った。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p><b>International Workshop on Bantu Microvariation</b> における講演 “<b>Morphosyntactic variation in Bantu: Convergence and divergence</b>”（招聘者⑧⑨との共同講演）</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）、言語学科、英国 品川 大輔（東京外国語大学）	8 日	0 日	0 日	8 日

招へい者⑪の氏名・職名：**Sonja Riesberg**（ポスドク研究員）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画）</p> <p>Sonja Riesberg 博士は本事業の連携研究者であり、本事業の連携の核となる CoEDL のポスドク・フェローである。また、CoEDL の事業のうち、言語アーカイビング及び少数言語のコーパス構築とコーパスに基づく言語類型論的研究を担っている。Sonja Riesberg 博士は本課題の事業のうち特に「言語データアーカイブ」「言語コーパス構築」「コーパスを利用した理論的研究」に参画する。平成 28 年度の招へいでは、国際シンポジウム “<b>International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics</b>” において講演を行い、「コーパスを利用した理論的研究」の可能性を周知した。また、ワークショップ <b>Two-day lecture and workshop on "linguistic fieldwork and language documentation"</b> (14-15 March, 2017) を開催し、言語データの収集とコーパス構築に関する講義を行うとともに日本側の若手研究者を指導し、担当研究者とともに若手研究者がデータにソフトウェア ELAN を用いてアノテーションを行うことを助けた。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>“<b>International Symposium on Language Documentation and Corpus Linguistics</b>” における講演 “<b>Cross-corpus annotation - a report from the ongoing Three Participant-Project</b>”</p> <p>ワークショップ <b>Two-day lecture and workshop on “linguistic fieldwork and language documentation”</b> (14-15 March, 2017) における講義 “<b>How to use the data annotation software ELAN (lecture and practice)</b>” および “<b>Method of linguistic fieldwork: how to elicit linguistic data from speakers (lecture)</b>”</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
オーストラリア国立大学、言語学科、オーストラリア	13 日	0 日	0 日	13 日

塩原 朝子（東京外国語大学）				
----------------	--	--	--	--

招へい者⑫の氏名・職名：Alexander Coupe（准教授）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な招へい計画）</p> <p>Alexander Coupe 准教授は本事業の連携研究者であり、ナンヤン工科大学において東北インドのチベット・ビルマ系言語、及び、言語の構造的多様性・共通性の解明に関する研究を行っている。Coupe 博士は本課題の事業のうち特に「言語の通時的変化・分岐」に関する研究に参画する。平成 28 年度の招へいでは、研究発表と意見交換の場として開催された 2 回のフォーラムで、文法化および名詞化に関する発表を行った。また、ミャンマーおよび東北インドのチベット・ビルマ系言語の通時的変化と多様性に関する共同研究に向けての打ち合わせを行った。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>アジア・アフリカ言語文化研究所におけるフォーラムで以下の二回の発表を行った。</p> <p>"On grammaticalization processes in Ao: Sources, pathways and functional extensions" 1, March 2017</p> <p>"Nominalization and grammatical complexity in Tibeto-Burman and beyond" 2 March 2017</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名） 及び日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	
ナンヤン工科大学、言語学・多言語研究科、シンガポール 澤田 英夫（東京外国語大学）	8 日	0 日	0 日	8 日

※本年度の招へい者毎に作成すること。

## 7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。